Retro-Future

古くて新しい　もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べるほかの多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。

第11回 BOZAK

1950年頃に米国の東海岸にあるコネチカットに設立された音響の研究会社で、創立者のルーディー・ボザーク氏は当時Mcintosh のスピーカーの設計に携わりその原型を作った事で有名。その後自社ブランドBOZAKを立ち上げて、音楽性とデザイン性に富んだ大小様々なスピーカー生産していた。ユニットは振動板を独自に開発した3つの高中低域用ユニットに大型のアルニコマグネットを搭載させたもので、再生音も陰影に富んだ音の中にメリハリのきいた中高音と重圧でスケールに富んだ低音が魅力的な東海岸のインテリジェンスを感じる音の世界を表現してくれる。日本では1974年頃からデザインを一新したムーリッシュモデルが日本コロムビアにより輸入が開始されたが、この頃はマグネットは全てフェライトに変更されており、その後のBOZAKの渋い音、もたついた音という評価の要因となったのかもしれない。

本文／**田中伊佐資**
キャプション／岡田圭司（アトリエJe-tee代表）
撮影／小林幹彦（彩虹舎）

B-4000 シンフォニー No.1

1954年頃に開発されたモデルで、上位機種 のB310 コンサートグランドより一回り小さいモデルだが、B199Aウーファー×2個、B209ミッドレンジ×1個、B200Xトゥイーター×8個の豪華なユニット構成となっている。トゥイーターを複数アレイ状に配置する事によって音場空間の拡大と中低域ユニットとの音のつながりを向上させている。とても重心が低くハイスピードな低音と滑らかな中高域音が濃密に絡み合うサウンドは良く知られる他のヴィンテージスピーカーとは別格な音の世界があり、特に名前通りにクラシックのシンフォニーの再生音は一聴の価値がある。市場価格95万円前後／ペア

含みのある渋さに歯切れが加わるクラシックが、ひとかたならずいい

「きょうはボザークでいきます」。アトリエJe-tee代表の岡田圭司さんが発表した。ウソのようだが店の扉を開けたところで、このようにして今号のテーマを僕は知る。事前に聞けばもちろん教えてくれるが、パソコンでついつい検索などをしてしまい、偏った先入観で臨んでしまうことになる。いつもまっさらからスタートがいい。ただボザークと聞いた瞬間に、「これクラシック向きだよなあ」とそれ系に疎い僕はかすかに気落ちした。聴いたことがないながらも、ボザークはなんとなくそういうイメージなのだ。幼稚な発想ながら、ドボルザークと名前が似ているせいか。

実際、その日2機種聴くうちの小振りなB-302イタリアンゴシックは、モーツァルトの交響曲第38番からスタートした。いつもキング・コールからスタートするのに、岡田さんもクラシック向きとみているのだろうか。次がピアノ・ソナタ、その次はロッシーニのチェロ・ソナタ。「ヴィンテージでもオールマイティにいける」を標榜する岡田さんにしては異例のクラシック3連発だ。そういう場合、嫌がらせのように「そろそろマドンナでガーンといきましょう」と言える間柄なのだが、僕はずっと黙っていた。なぜか。クラシックが、ひとかたならずいいのだ。

何かこう人の気持ちを落ち着かせる深み、翳りがある。英国製スピーカー、たとえばクラシック・ファンに好かれるタンノイのような含みのある渋さに近い。だが、もっとかっちりと歯切れがある。そしていかにもアメリカ東海岸を思わせる重みというか手応えがある音だ。

岡田さんは「密閉型でキャビネットは頑健に作られています」と途中で説明してくれた。これまでバスレフ型やホーンロードをかけたもの、平面バッフルのようなタイプを聴いてきただけに、肌合いの異なる音の凝縮感を覚えないわけにはいかない。またヴォーカルものも絶品だ。泰然としたシナトラのバラードには心打たれた。

次はウーファーがダブルになって、トゥイーターも8個というB-4000シンフォニーNo1。はなから「シンフォニー」と銘打っている。この結果はお察しの通りというしかない。トリとなるシンフォニーの前に、多分初登場となるミーシャが歌い出した。僕は残り全部クラシックでいいと思っていたぐらいだが、こういうせつせつとした絶唱ヴォーカルはヴィンテージ・スピーカーが無敵。からっとした西海岸とはまた違った愁いがある。B-302と雰囲気、質感はほぼ同じで、当たり前だけどスケールアップが著しい。そしてモーツァルトの交響曲だ。ブワッと前と後ろに広がる。さほどクラシック好きでもない僕がずっと聴いていたいと思わせた。隠れた名品をまた知ってしまった。

B-302A FRENCH PROVANCIAL

フレンチプロヴァンシャルと名付けられていて1958年頃に開発された、優雅な南仏スタイルのデザインが豪華な雰囲気を演出している。職人のハンドメイドで仕上られた箱に、B199Aウーファー×1、B209ミッドレンジ×1、B200Xトゥイーター×2の構成で比較的コンパクトなキャビネットだが、申し分のないくらい重圧でハイスピードなサウンドが奏り出され、クラシックはもちろん JAZZ、ROCK、ヴォーカル系サウンドにも十分対応してくれる。市場価格65万円前後／ペア

B-302A ITALIAN GOSICH

イタリアンゴシックと名付けられており1961年頃に開発され、イタリアの歴史あるゴシック建築をモチーフにデザインされている。フレンチプロヴァンシャルのデザイン違いでユニット構成も全く同じ3ウェイとなっている。こちらも職人の丁寧なハンドメイドで作られた美術品のような箱から、想像を遥かに上回る音の世界が繰り出される。こちらも前記モデル同様に日本への正式に輸入はなかった。市場価格60万円前後／ペア

B199A

紙に特殊な素材を混合させた素材で作られた厚みのある固い振動板を強力なアルニコマグネットで駆動させる30cmウーファー。エッジは固い布製のギャザードタイプになっているため、ハイスピードな低音再生を可能にしている。また、ボイスコイルの口径がかなり小さいため、高域特性も良くB200Xトゥイーターとの2ウェイ構成としても使用できるほど

B209

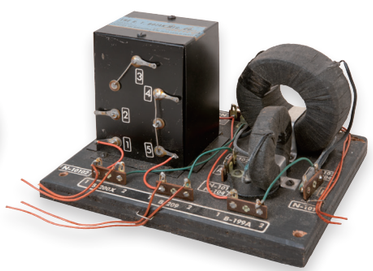
メタル素材とゴム系樹脂をラミネートした特殊な製法で形成されたコーン紙を持つユニットで、400Hzから2,500Hzの帯域を受け持たされ3ウェイシステムに1個または2個搭載されている。口径16cmのスコーカーながらフルレンジでも使えるくらい優れた特性を備えている

B200X

紙と薄いアルミニウムのラミネートコーンで形成された7.5cm口径の振動板を大きなアルニコマグネットで駆動させている。2,500Hz以上の帯域を受け持ち、システムによって2個～8個搭載されている。複数個のトゥイーターをアレイ状に配置する設計はその後のMcintosh スピーカーシステムにも採用されることとなった

B207A

B199AウーファーとB200Xトゥイーターを15インチサイズのアルミダイキャストフレームにマウントして同軸2ウェイユニットを形成している。ネットワークは介さず2個直列に接続されたトゥイーターを4μのコンデンサーでローカットしてウーファーとパラレル接続されている。1970年代以前のB-300系のシステムにはこのユニットが搭載されている



N10102

大型のオイルコンデンサーとコイルを6dB/octで接続された3ウェイ専用のネットワークでクロスオーバーは400Hz ／ 2,500Hzに設定されている。トゥイーターがコーン型という事で通常よりも下の帯域まで受け持っており、その分スコーカーには2オクターブほどの帯域だけを受け持たせて全体としてなだらかな特性の再生音を完成させているようだ

取材協力：アトリエJe-tee　〒153-0064　東京都目黒区下目黒3-24-14＃701　☎03-3715-5336　ホームページ：http://www.je-tee.com